

SHOW-HI SVシネマフルーツ

★★★

けものがいる (La bête)

2023年／フランス・カナダ映画

配給：セテラ・インターナショナル／146分

2025（令和7）年4月29日鑑賞

テアトル梅田

Data

2025-46

監督・脚本・音楽：ベルトラン・ボ
ネロ

原作：ヘンリー・ジェイムズ『密林
の獣』

出演：レア・セドゥ／ジョージ・マ
ッケイ／ガスラジー・マラン
ダ／グザヴィエ・ドラン／マ
ルタ・ホスキンス／マルタ
ン・スカリ

みどころ

私が高校時代にひそかに回し読みをした山田風太郎の原作を映画化した『魔界転生』(03年)はメッチャ面白かった。しかし、ポン・ジュノ監督最新の「SFもの」「転生もの」たる『ミッキー17』(25年)はヒネリが効きすぎ。そして、同じ「SFもの」「転生もの」たる本作は難解すぎて、私にはイマイチ！

『アデル、ブルーは熱い色』(13年)で怪しげな魅力を放ったフランスの美人女優・レア・セドウの魅力はなお健在だが、予知能力者や占い師の「けものがいる」との予言に振り回されるヒロインはいただけない。やっぱり、私には「SFもの」は不向きなのかも・・・？

■□■「SFもの」は難しい！とりわけ「転生もの」は難しい！■□■

「SFもの」にはさまざまなジャンルがあるが、「SFもの」は近未来もしくは遠い未来の宇宙を舞台にしたものが多いから、その理解は難しい。また、「SFもの」の中でも「転生もの」になると、更にその理解が難しくなる。その典型が、去る4/10に観たポン・ジュノ監督の『ミッキー17』(25年)だ。同作では、①エクスペントブル（使い捨て人間）、②記憶移植、③人体プリント（人体複製）やマルティプル（重複存在）の禁止、④植民計画とニフルヘイム植民団そしてクリーパー、等々の「キーワード」の理解が不可欠だった。それらを理解しなければ、原作では7回、映画では17回(18回?)も生まれ変わる（転生する）ミッキーという“使い捨て人間”の悲しい物語を理解することはできなかった。

そもそも、転生とは、Wikipediaによると「肉体が生物学的な死を迎えた後には、非物質的な中核部については違った形態や肉体を得て新しい生活を送るという、哲学的、宗教的な概念。これは新生や生まれ変わりとも呼ばれ、存在を繰り返すというサンサーラ教義

の一部」をなす。「これはインドの宗教（バラモン教、ジャイナ教、仏教、ヒンドゥー教、シーカ教）の中核教義とされ」と解説されている。

私が高校時代に密かに回し読みした『くノ一忍法』は山田風太郎の代表作だが、それを映画化した『魔界転生』（03年）（『シネマ3』310頁）は、天草四郎の怪しい魅力、そして「魔界」から「転生」してきた剣豪たちと柳生十兵衛との対決等がメチャ面白かったが、それは天草四郎や柳生十兵衛たちのキャラに馴染みがあるためだ。

それに対して『ミッキー17』の出来がイマイチだったのは、ミッキーのキャラがあまりにSF的すぎ、ついていけなかつたため・・・？しかして、私の大好きなフランスの美女優レア・セドゥが主演する本作は、ヘンリー・ジェイムズの原作にインスピアされた「SFもの」、しかも「転生もの」らしいが、その出来は？その難易度は？またその時は？

■□■近未来、2044年のパリでは“感情の消去”が不可欠！■□■

2025年の今、囲碁・将棋の世界では、AIの棋力が人間の棋力を超えたか否かが1つのテーマになっている。また、チャットGPTの登場とともに、生成AIの能力がどこまで伸びるかが注目されている。

しかし、本作が描く近未来たる2044年のパリでは、革新的な進化を遂げたAIが、国家の社会システム全般を管理し、失業率は67%に達したこの社会では、人間の感情は不合理かつ不必要的ものとみなされ、かつて人間が従事していた仕事の大半をAIが代行しているらしい。そして、また、Bらしい。

そんな時代状況下、自らの能力と知識を生かせる有意義な職に就きたいと望んでいる孤独な女性ガブリエル（レア・セドゥ）は、今、面接官で指導役のAI（声：グザヴィエ・ドラン）から、「DNAの浄化により、前世で君の潜在意識を汚染した古いトラウマを消し去ることができる。我々は君の感情の排除を手伝える」と告げられたが、さあ、彼女はどうするの？

■□■1910年のパリに転生！■□■

私が『ミッキー17』を高く評価できなかつたのは、転生をテーマとしたSF的な設定のわかりにくさのためだが、それは本作も同じだ。前述のように述べる指導官のAI面接官に対して、感情を浄化するセッションに同意したガブリエルが転生したのは、1910年のパリ。そこでの彼女の身分は著名なピアニストだが、それは一体なぜ？そんな彼女は、人形製造工場を営む夫（マルタン・スカリ）との穏やかな結婚生活を送っていたが、とあるパートナーの席でイギリス人男性ルイ・ルワンスキ（ジョージ・マッケイ）と再会したことで、その日常が揺らぎ始めるが、それは一体なぜ？

1910年のパリを舞台とした物語におけるガブリエルの美しいドレス姿は魅力的だが、私には、彼女とルイとの関係がさっぱりわからないばかりか、ルイに促されて赴いた予知能力者（エリナ・レーヴェンソン）のもとで、「けものがいる。今にも飛びかかるってきそう・・・男がひとり見える。彼は夢の中でしか愛を交わせない」という謎めいた予言を聞かされた

ガブリエルが、それに悩まされている姿もさっぱり理解できない。そんな私には、「SF もの」は、そして「転生もの」はやっぱり向いていないのかとも？

■□■2度目、ガブリエルは2014年のロサンゼルスで転生！■□■

2つ目のセッションで、ガブリエルがさかのぼった新たな前世は2014年。彼女は女優志望の売れないモデルだったが、それは一体なぜ？私にはそれがまったくわからないからライラ・・・。

さらにここでも、ガブリエルがパソコンのモニター上に出現した「ジーナの占い」というサイトにアクセスすると、怪しげな占い師のジーナ（マルタ・ホスキンス）が現れ、「愛する男にまた会えるか知りたいのね？」と一方的に語り出し、1910年の予知能力者と同じように、「あなたが心配だわ。彼は夢の中でしか愛を交わせない」と忠告してきたからビックリ！コリヤ一体ナニ？さらに、その直後に発生した大地震で屋外に出たガブリエルは、ルイと名乗る青年と出会うことによって、第2の転生でもガブリエルとルイの奇妙な関係が展開していくから、その物語に注目！しかし、それも私にはさっぱり・・・。

■□■再び2044年のパリへ！感情消去の成否は？■□■

私がフランス人女優・レア・セドゥをはじめて見たのは、『アデル、ブルーは熱い色』（13年）（『シネマ32』96頁）。同作は“エロじじい”たる私の大好きな『中国の植物学者の娘たち』（05年）（『シネマ17』442頁）と同じく、若い女性同士の禁断の同性愛の物語だった。また、同作では、アデル役を演じた女優も魅力的だったが、エマ役を演じたレア・セドゥはそれ以上に魅力的だった。

そんなフランス美女・レア・セドゥの『アデル、ブルーは熱い色』への出演は28歳の時だが、本作に出演した時は40歳。容色の衰えはいささかも感じないから、ストーリーの作り方によっては今なお彼女の魅力は輝くはずだが、私にはまったくワケのわからない「SF もの」の転生者となつた本作では、残念ながら彼女の魅力はイマイチ！

そんなレア・セドゥが演じるガブリエルは、当初の目論みどおり、感情の消去に成功でもしたのだろうか？そんな本作の結末はあなた自身の目でしっかりと。

2025（令和7）年5月9日記

